実習指導および教育課程論における記録の指導
―苦手意識を克服する授業の工夫及び保育士養成校の役割を考える―

永谷孝代*，星川佳加**

要約

本稿は、学生の「実習の記録」に対する苦手意識の克服を目的とした取り組みについて、実習指導と教育課程論に焦点をあてて記述し、その成果に対する考察を行なうものである。そのうえで、保育士養成校の役割について考えたい。

1年時の「実習入門」及び実習指導において「実習の記録」の指導を丁寧に行ったにもかかわらず、実習後学生は「実習の記録」に対して極めて低い自己評価をつけた。これを克服すべく、実習を中心とした科目間連携科目の一つである教育課程論では、記録にも力を入れて授業を実施した。そこでは子どもの姿を丁寧に書こうとする学生の姿が見られた。2年の実習指導では、子どもの姿に加え「気づき」を書くことを目指し授業内容を工夫した。コロナ禍の中全員が無事実習を終え、現場評価、自己評価共に1年時から大幅に向上した。特に「実習の記録」に対する自己評価は飛躍的に高まり、これと連なるように総合評価も向上した。学生は「実習の記録」に対する苦手意識の克服を通して、実習そのものを頑張ったという実感を得、さらにそのことが自分自身への肯定的な認識へとつながったのではないかと考えられる。様々な生活を背負う中でも、学生はこうした一つ一つの課題への取り組みを通して自己肯定感を高め、やがて保育の現場へと巣立っていく。これを支えることこそ保育士養成校の役割であると考える。

キーワード：実習の記録　実習指導　教育課程論

2020年9月29日受理

1．問題と目的

大阪健康福祉短期大学子ども福祉学科（以下本学と言う）は保育士の指定養成校である。本学で取得できる資格は保育士資格と幼稚園教諭2種免許状、社会福祉主事任用資格である。入学してくる学生の様子も年々変化しているが、近年、緊張感や不安感の高い学生が増えている。こうした学生にとっては、最初に出あう実習は大きな負担感につながっている。1年次の実習後に学生の感想として一番多かったのは「実習の記録がしんどかった」「何を書いていいかわからない」「深夜までかかり睡眠不足で毎日実習に行った」など実習の記録に対するものだった。そして、自己評価の中でもっとも評価が低かったのは「実習の記録（保育日誌）」であった。また、一方で「子どもはかわいかった」「子どもと遊んで楽しかった」「設定保育は緊張したけど、子どもが楽しんでくれた」など子どもと接することに対しては「楽しかった」という感想が多かった。自己評価や学生の感想を分析すると実習に対する負担感は「実習の記録」に対する負担感であり、本学の学生の特徴でもある「書くこと」に対する苦手意識が実習における苦手意識につながっていると考えられる。

*大阪健康福祉短期大学
連絡先：永谷孝代
〒590-0075 堺市堺区南花田口町2丁3-20
大阪健康福祉短期大学 子ども福祉学科
E-mail:t.nagatani@kenko-fukushi.ac.jp
**大阪健康福祉短期大学

本稿では、「実習の記録」における苦手意識を克服し、実習を通して「がんばった」「がんばれた」という自己評価につなげるためにはどのような授業内容が必要かについて学生の実態をふまえて検討し、実践したこと考察したことを通して、その実践の成果を探る。

保育における記録とは、保育所保育指針解説では「子どもは、日々の保育所の生活の中で、様々な活動を生み出し多様な経験をしている。こうした姿を記録することは、保育士等が自身の計画に基づいて実践したことを客観化することであり、記録という行為を通して、保育中には気付かなかったことや意識していなかったことに改めて気付くこともある」[1]と説明されているように、実践や子どもたちの姿を振り返るものであると共に、子どもに対する理解を深め、さらなる計画や実践に生かしていくものである。

例えばAちゃんとBちゃんがおもちゃの取り合いになった場面について、多くの保育士はAちゃんやB ちゃんの発達や生活の状況、二人の関係や集団の様子等をふまえながら、なぜAちゃんは強引におもちゃを取ってしまったのか、なぜBちゃんは「やめて」と言わずに泣いてしまったのか、と考察しながら記録を書く。また、その記録を他の保育者と共有することで、子ども理解を多面的にし、お互いの子ども理解を深め合うこともできる。こうした営みを通して、保育士は子どもたちに対する理解を深め、さらに良い保育を目指すことが可能となる。

保育士資格取得に向けて勉強中である学生にとって、初めての実習で子ども理解を深める記録を書くことは難しいであろう。しかしながら、実習を重ねるうちに記録の意義を理解し考察を深める学生の姿はこれまでにも見られた。例えば2018年度の卒業生の一人は、「実習で学んだ日誌の必要性」をテーマに書いた卒業研究レポートの中で「ただ書けばいい、それだけの日誌を書いていた」1年生の頃を反省し、「省察することは、子どもとのかかわりにおいて大切なことに気づいたり、次の日の課題をみいだす機会となる」ことに気づいたと記している。学生は、記録に対する苦手意識を克服し、記録を書くことを通して子ども理解を深め、子どもに寄り添う保育を展開できる保育士に育っていくのではないだろうか。

このような課題意識のもと、実習指導と科目間連携を行っている教育課程論における記録の指導について述べる。2019年度後期に1年生を対象として開講された教育課程論では、保育・幼児教育における計画と評価についてはもちろんのこと、これらと切り離すことのできない記録についても重点的に授業を行った。計画を作成する際には子どもの姿を適切に捉えておく必要があるが、記録はこれを可能にする役割をもつ。また評価にあたっても、記録はその根拠の役割を果たすものである。そのことを踏まえると、記録においては一日の流れ等を記すこと以上に、子どもの姿を書き表す力が必要となる。教育課程論においては、実習の経験についてエピソード記録を作成し、これを読み合った。この取り組みについて考察する。

また、2年次の実習の中では、1年次の取り組みを経て、特に「実習の記録」について、苦手意識を克服し、子どもの姿や取り組み等を通しての気づき、考察を記入することを目標として、授業内容の工夫を行ってきた。その効果について分析したうえで、保育士養成校として何が求められているのかについて考察する。

２．実習・実習指導の現状

１）実習期間・実習内容・実習指導方法について

本学における２年間の保育実習・教育実習のスケジュールは表１のとおりである。

実習の大きな流れは、実習の意義・目的・内容を理解するための事前指導から始まり、施設での実習、実習終了後の事後指導、実習報告会を終了して、実習は完結する。ただし、2020年度は新型コロナウイルス感染症の影響で実施時期、期間、については変更を行った。

また、実習時期・期間と本稿にある実習入門、教育課程論の授業時期については表２で示す。

＜表１＞　保育実習・教育実習のスケジュール

実習種別	単位及び必修・選択の別	実習施設	実習内容	履修年次	時期
保育実習Ⅰa（保育所）	２単位（資格必修）	保育所	参加実習	１年後期	１１月
保育実習Ⅰb（居住型児童福祉施設）	２単位（資格必修）	乳児院、児童養護施設	参加実習（宿泊実習を含む）	１年後期	１月
保育実習Ⅱ	２単位（資格必修）	保育所	参加総合実習	２年前期	５月末～６月
幼稚園実習Ⅰ 幼稚園実習Ⅱ	４単位（資格必修）	幼稚園	参加実習 参加総合実習	２年前期	９月
保育実習Ⅲ ｂ・ｃ・ｄ	２単位（選択必修又は資格必修）	障害児・者施設 児童館・学童保育所 児童養護施設	参加総合実習	２年後期	１１月

＜表２＞　2019 年度 1 年次の実習時期及び実習関連科目・教育課程論

科目	1年前期（1セメスター）					1年後期（2セメスター）						
月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1		2
実習指導						夏季休暇	保育実習Ⅰa指導	保育実習Ⅰa・保育所等・10日間	事後指導	保育実習Ⅰb指導	保育実習Ⅰb・施設・10日間	事後指導
実習入門	○保育園見学「子どもの観察」「観察記録の取り方」		○施設見学「児童養護施設・乳児院」「施設概要」									
	○実習の基礎「保育所の一日」「保育者の配慮」「実習の記録の書き方」											
保育基礎ゼミⅠ（前期） 保育基礎ゼミⅡ（後期）	○保育技術入門「壁面制作」「手遊			○保育園訪問・手遊び披露・壁面プレゼント			○保育教材制作（手袋人形）		○施設実習調べ学習「養護施設（乳児院）とは」			○実習のまとめ
	○実習準備「名札」制作											
	※ 保育基礎ゼミは本学の独自授業である。2019年度より、基礎ゼミで行っていた実習入門について、新たに「実習入門」の科目を増やし、基礎ゼミでは「保育実技」の内容を行った。											
教育課程論	※ 1年次後期に開講される。講義計画は実習指導の内容と連関している。保育所での実習に向け指導計画案を作成する時期に保育における計画について学び、実習を終え振り返りを行う時期に記録と評価について学ぶ。その後、計画・記録・評価について知識と理解を深める。						保育における計画		保育における記録			
									保育における評価			

２）学生の現状と 2019 年度（1 年次）における実習指導内容の変更

本学では、保育実習で依頼する保育園（以下実習園と表記する）とは連携を深め、毎年実習指導者懇談会を開催して、実習のあり方や学生状況の交流を図っている。その中で、実習園より指摘された実習生の課題は以下の通りである。

①「実習の記録」の書き方（誤字・脱字、文章表現、気づきが書けない等）
②言葉づかい（敬語の使い方、マナー等）
③積極性（自分から声をかけて聞く、メモを取るまたはメモに集中しすぎて子どもと遊べない等）
④準備不足（指導計画案に必要な教材、手遊び、絵本等）

反面、「子どもとよく遊ぶことができる」という点は評価されており、得意な面を伸ばすことで苦手な部分の克服につながればよいと願い、近隣の保育園と連携し、現場体験の機会を増やし、子どもと触れ合い、子ども理解や技術を高めていく講義内容を多く行ってきた。また、科目間連携を図り、教員間で教授

内容や学生理解の共有を強化してきた。さらに、実習指導の 8 コマを充足する形で本学独自科目である「保育基礎ゼミⅠ（前期）・Ⅱ（後期）」を平行して行ってきた。

しかし、前述したような学生の課題について、これまでの実習の中で克服するには至らず、より一層の改善が求められていた。そこで、2019 年度については、現場実習が始まるまでに、子ども理解、保育所の役割、記録の書き方等、実習の基礎知識について時間をかけてていねいに取り組むべきではないかという方針が確認され、前期に「実習入門」として新たな授業を組み込んだ。さらに実習指導についても、授業数を 8 コマから 15 コマとした。

３）2019 年度実習・実習指導の講義概要

2019 年度の「実習入門」「保育実習Ⅰa」の目的は表３、表４の通りである。

＜表３＞「実習入門」の目的

①実習の意義・目的を理解し、実践的知識・技術の習得を図る。
②保育所、児童福祉施設等の役割や機能を具体的に理解する。
③観察や子どもとの関わりを通して子ども理解を深める。
④保育の計画・観察記録について、体験を基に理解し作成できる。

＜表４＞「保育実習Ⅰa」 の目的

①保育実習の意義・目的を理解する。
②実習内容を理解し、自らの実習の課題を明確にする。
③実習施設における子どもの人権と最善の利益の考慮、プライバシーの保護と守秘義務について理解する。
④実習の計画・実践・観察・評価の方法や内容について具体的に理解する。
⑤実習の事後指導を通じて、実習の総括と自己評価を行い、今後の学習にむけた課題や目標を明確にする。

４）講義内容の工夫

「実習入門」は実習に対する基礎知識（特に子ども観察に基づく、子ども理解と記録の書き方）の学びを深め、本学の特徴とも言える「実習の記録」に対する負担感や不安感の解消を目標に授業内容を工夫してきた。主な内容は以下のとおりである。

①保育所での体験観察（観察のポイントを学ぶ、保育所の一日の流れを知る）
②観察を基に記録した内容を「実習の記録」に記入し、記録の書き方を学ぶ。
③観察を基に子ども理解を深める。発達に基づく指導計画案の作成（指導計画案は絵本を教材に、教材分析を行い作成）
④指導計画案に基づく模擬保育の実施（グループでの報告会、評価）
⑤児童福祉施設（養護施設）の見学（施設より概要、子どもの背景等の説明を受ける）
⑥まとめ（学びを振り返り、実習課題を考える）

「保育実習Ⅰa」は前期の「実習入門」を基に、実習のための書類作成、心構え、態度等の実習の基本についての学びと実習施設で設定保育を行うことを課題とし、指導計画案の作成、模擬保育、修正、準備の一連の流れに沿って進めた。特に、本学では現場経験のある講師を実習指導体制に組み込んでいるため、

講師に模擬保育の実演をしてもらい、見える形で学生の学びを深めると共に、指導計画案においても一人ひとりの「ねらい」と「思い」を聞きながら添削を行うことで、子どもの姿をイメージしながら計画が立てられるような工夫をしている。

３．学生の課題の克服

１年次、11 月にはじめて行った「保育実習Ⅰa」では、例年になく、緊張感や不安感が高い学生が多く、実習前から不定愁訴を訴え実習中止に至ったケースや、1 日行っただけで「もう続けられない」と欠席してしまう学生が多数いた。また、10 日間の実習は何とか乗り切ったが、達成感よりしんどさや負担感の大きかった学生が多かった。

昨年度までの反省を踏まえ、「実習入門」の授業の導入やよりていねいな授業内容を行うためにコマ数を増やすなどの工夫を行ってきたにも関わらず、昨年度より、学生の反応は負担感やしんどさの方が高く感じられた。こうした、学生の負担感がどこからくるのかについて、現場評価と自己評価を分析してみることで、原因を究明した。

比較の結果は表５の通りである。計画や態度に関しては自己評価を高くつけている学生がいる一方で、総合評価と記録の評価では現場評価より自己評価を低くつけている学生が多いことがわかった。特に記録については、学生の 75%が C 以下に評価している。

＜表５＞　2019 年度　現場評価及び自己評価比較

総合評価	項目	A	B	C	D	E
2019 年度	現場評価	13%	42%	40%	5%	0%
2019 年度	自己評価	11%	34%	51%	4%	0%
記録						
2019 年度	現場評価	15%	34%	38%	9%	4%
2019 年度	自己評価	9%	15%	51%	25%	0%
計画						
2019 年度	現場評価	9%	38%	45%	8%	0%
2019 年度	自己評価	23%	19%	28%	28%	2%
態度						
2019 年度	現場評価	11%	34%	51%	4%	0%
2019 年度	自己評価	26%	34%	35%	5%	0%
（備考：A 大変よくできる　B よくできる　C できる　D 努力が必要　E かなり努力が必要） 太枠は自己評価						

この結果から、実習での子どもたちの出会いや体験など「楽しかった」「設定保育をがんばった」等の肯定的な気持ちを上回る「実習の記録」に対する負担感が学生の苦手意識となり実習を精神的に苦痛なものとして捉えさせていることがわかった。

苦手意識を克服するために「実習の記録」の書き方の指導について、大学としての改善が求められているものと考え、科目間連携として教育課程論での授業内容の工夫や２年次での実習指導内容の工夫を行ってきた。

４．記録を書くことに対する苦手意識の克服のために：2019 年度教育課程論の取り組み

１）保育士養成校の教育課程論における記録の指導

教育課程とは、「子どもたちの成長と発達に必要な文化を組織した、全体的な計画とそれに基づく実践

と評価を統合した営み」であるとされている[2]。これをふまえると、保育士養成校における教育課程論は、乳幼児期の子どもの成長と発達に必要な文化を組織しうる保育の計画と実践、評価について教授する科目であるということができるであろう。

保育の計画及び評価については、保育所保育指針解説のなかで以下のように記されている。曰く、「保育所における保育は、計画とそれに基づく養護と教育が一体となった保育の実践を、保育の記録等を通じて振り返り、評価した結果を次の計画の作成に生かすという、循環的な過程を通して行われるものである」[3]。このことから、保育の計画と評価を扱う上で、記録が必要なものであることがわかる。保育士養成校における教育課程論においても、保育の計画と評価にあわせて記録について教授することは、必要なことである。

それどころか、保育士養成校における教育課程論では、記録の指導をこそ丁寧に行うことが重要なのではないかと考えられる。

保育所保育指針解説において、「指導計画は、保育士等が一方的にある活動を子どもに与えてさせるためのものではなく、子どもの実態に基づいて、今育ちつつある子どもの様々な資質・能力を十分に引き出すためのもの」であり、「そのため、現在の子どもの育ちや内面の状態を理解することから、指導計画は始まる」とされている[4]。なかでも、実習生が実習指導で挑戦する短期的な指導計画については、「その時期の子どもがどのようなことに興味や関心をもっているのか、どのようにして遊んだり生活したりしているのかといった実態に即して」作成するものとされている[5]。すなわち、保育の計画を考える土台として、子どもに対する理解が不可欠なのである。

この子どもの理解を可能にする方法の一つが、記録である。保育所保育指針解説において、記録に際しては、保育士が自身の保育実践を振り返る視点と共に、「子どもに焦点を当てて、生活や遊びの時の様子を思い返してみる視点」が必要であるとされている[6]。また、「記録を通して、保育士等は子どもの表情や言動の背後にある思いや体験したことの意味、成長の姿などを的確かつ多面的に読み取る」ということも明記されている[7]。

このように、保育士は記録を通して子どもの実態を捉え、子どもに対する理解を深める。そのうえで、「指導計画に基づく保育の実践やそこでの一人一人の子どもに対する援助が適切であったかどうかを振り返り、そこで浮かび上がってきた改善すべき点を次の指導計画に反映させる」[8]。その繰り返しが、保育の質の向上につながるのである。

保育士養成校の教育課程論においても、保育の計画と評価だけでなく、これらに不可欠な記録について教授することは重要なことである。その際、学生が保育の計画と評価に資する記録のありかたを学び取ることができるよう、最大限の配慮と工夫をする必要がある。すなわち、子どもの生活や遊び、表情や言動を的確にとらえること、そうした子どもの姿の背後にある思いや活動の意義を考察すること、これらのことを文章等の記録にすることを、可能にする教育方法が、保育士養成校における教育課程論において求められるのではないかと考える。

２）エピソード記録を書き読み合う

このような意識のもと、2019 年度後期に開講された教育課程論においては、保育の計画と評価とあわせて記録についても指導を行った。記録の意義等に関する理解を深めると共に、記録を書くことに対する苦手意識を解消すること目指し、学生自身にエピソード記録を書いてもらいこれを冊子にして読み合うことに取り組んだ。

2019 年度に教育課程論を受講した 1 年生の多くは、先述の通り 11 月に保育園での実習を、1 月に児童養護施設や乳児院での実習を経験した。実習を終えた直後であれば経験したことを表現したい思いが比較的高まっているのではないかと考え、それぞれの実習直後の授業でエピソード記録を書く課題に取り組んでもらった。課題を出す際には「実習で一番心に残っている場面について、私に教えてください。みんながどのような経験をしてきたのか、とても興味があります。難しいことは気にしなくていいので、あなたの経験が私に伝わるように書いてください。」と伝えた。できる限り書くことに対する学生の抵抗感を和らげたいと考えていたからである。また、エピソード記録の作成の前には、ワークシートに取り組んでもらった。実習の中で一番心に残った場面を選び、

その場面について「いつ、どこで、だれが、何を、どのように、どうした」という視点から整理するというものである。その上で、誤字脱字や文法等は一切気にせず下書きをしてもらい、その下書きを読み直し加筆修正をして提出してもらった。すると、普段文章を書くことに抵抗感を示す学生にも、具体的に子どもたちの姿を思い浮かべながらエピソードを書き進める姿が見られた。

提出されたエピソードの中には、子どもたちと楽しく過ごした場面や、保育のやりがいを感じた場面について書いたものが多くあった。一方で、学生が激しく葛藤した場面や、後悔を抱いている場面について書いているものもあった。他の学生と共有しても良いか意思を確認したうえで、同意を得られたもののみ冊子に綴じ、後日の授業で配布した。

学生たちは友人たちのエピソードに大変関心を持ったようで、配布した際には静かに冊子を読み進める姿が見られた。エピソードに描かれている場面について、自らも実習の中で同じような経験をしたと言う者の中には、共感を示す者もいれば、自分は異なる思いを抱いたと打ち明ける者もあった。エピソードを通して別の学生が自分とは異なる感じ方をしていることに気づき、自身の思いや考え方を自覚したと述べる者もあった。

３）エピソード記録に取り組んで

エピソード記録を書き、これを冊子にして共有する取り組みを通して、学生たちは子どもや保育に対する自身の姿勢や思いを相対化し理解するきっかけを得ることができたのではないかと思う。また友人たちのエピソードを通して、自分とは異なる保育や子どもの捉え方に触れると共に、それに共感したり疑問を持ったりする形で、保育に対して色々な思いや方法があっても良いのだということに気づいたのではないかと考えられる。

一方で、保育や子どもに対する考えを深める取り組みについては十分ではなかった。大半の学生が、子どもの姿から気づいたことを記したり、子どもの姿に対して「なぜだろう」と考察したり、保育者の関わりの背後にある考えや願いに思いをはせたりするには至っていなかった。今回は、エピソード記録の冊子を読んだ感想をコメントカードに記して授業担当者に伝えられるようにしたが、お互いの思いを交流する場は設けることができなかった。エピソード記録を読み合って感想などを伝えあう取り組みが有ればなお良かったのではないかと考えられる。

その一方で、子どもたちの言葉や動き、表情や雰囲気、さらにその時自分がどのように感じたかなど丁寧に書けているものは多くあった。授業担当者としてエピソードを読みながら、朗らかな子どもたちの姿と、それをあたたかく見つめる学生の姿が目に浮かぶようであった。今回の取り組みが１年生時点のものであることを考慮すると、これは一つの成果であったのではないかと考えられる。子どもの姿を丁寧に観てそれを表現することを土台として、子どもの言動や保育者の働きかけを考察する力をいっそう高めることが可能になると考えられるからである。

それと同時に、学生たちが「見たまま」を記したエピソード記録には、すでに彼ら・彼女らが保育士として大切な子どもと向き合う姿勢を持っていることが表れていると感じた。或る場面をどのように見取りどのように表現するかは、事実ではなく書き手に委ねられているため、「見たまま」を書いた文章には書き手の思いや姿勢が表れている。同じ場面を複数の人が観察し記録に書くとき、全く同じ記録が生まれることは無いであろう。それぞれの人が自分の視点からその場面を捉え、「見たまま」として書くのである。例えば「私を見つけて『ちぇんちぇーい』と笑顔でこっちに向かって走ってきました」という一文にも、その子どもをあたたかくみつめ、受け止めようとする学生の姿が表れている。このような点を積極的に評価し、学生に意識付けることで、エピソード記録の取り組みは学生にとって自分が子どもたちをどのように見つめているのかを捉えるきっかけになり得たのではないかと思う。これは、学生がこれから自分自身の保育観・子ども観を育んでいく第一歩につながっていく。今後は学生へのフィードバックの在り方についても検討していきたい。

なによりこの取り組みは、学生にとって、記録に対する抵抗感を少なからず和らげたのではないかと考えらえる。提出されたエピソードを読み授業担当者から肯定的なコメントを返したところ、子どもの姿って何を書いたら良いのかわからなかったけれど、

こうして見たままを書いたら良いのだということがわかって安心したという声が返ってきた。冊子にして読み合った後には、自分の書いたものがこうして形になって、皆に読んでもらえて嬉しいという声も聞かれた。11月の実習後には自分のエピソードを共有してほしくないと答えた学生が多かったが、これを冊子として読み合う経験を経た1月の実習後には、より多くの学生が冊子への所収を承諾してくれた。書くことに対する抵抗感の根底には、何を書いたら良いかわからない、書いても否定されるかもしれない、書いたって意味がない等の思いがあり、それらが少しでも解消されることで書くことに対する意欲が高まったのではないかと感じた。

５.「実習の記録」に対する苦手意識の克服のために

１）保育実習Ⅱにおける授業の工夫

「実習の記録」に対して「なぜ苦手意識が高いのか」について、日頃の学生の姿から、以下のような理由が考えられる。

①文章能力が低い
②子どもの発達について理解できていない
③書き方がわからない
④観察のポイントがわからない

これらの課題をもつ学生については、実習園からのコメントや評価から、学習能力や学習に対する課題があることが伺えた。こうした学生については個々の課題について個別に対応した。また、ある程度実習の記録が書けている学生については、実習園からは「一日の流れを繰り返し書くのでなく、自分が気付いたことを中心に書いて欲しい」という意見が一番多かった。

本学は実習を主軸にした科目間連携について意識的に取り組んでおり[9]、前述の教育課程論や他の科目でも、実習中の子どものエピソードについて取り上げることが多く、学生も何回もエピソードを書いている。しかし、子どもの観察を基に書いたエピソード（子どもの姿）から、どんなことに気づいたかと自己分析する機会は少ない。そこで、2年次の「実習の記録」について「観察から気づきを書くこと」を目標とした。そのために、「保育実習Ⅰa」で現場評価も高く、気づきや環境構成の記入ができている学生の「実習の記録」について、本人に了承を得て参考資料として配布し全体共有した。また、1年次の実習の記録から、子どもの姿の事例を引用し、場面からどのようなことが読み取れるかについて事例検討を行うとともに、現場経験のある講師から、保育士のねらいや配慮事項を説明してもらい、自分なりに想定して書いてみる経験を多く行った。また、実習指導の教科書として本学独自で作成した「実習ハンドブック」の中で、「1日の流れと保育士の援助」の資料の活用の仕方についても丁寧な説明を行った。本学の場合、いろいろ資料を配布しても、それをどのように活用していいかわからず、すぐ教員に聞きに来る学生が多い。資料を読み取り、学習の参考にしていく経験は、他の授業においても有効であり、主体的に学ぶ姿勢につながるのではないかと考えられたからである。

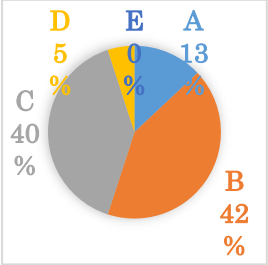
２）実習における評価の分析

今年度は、学生だけでなく大学としても、今までにない緊張感や不安感の中での実習となった。実習中も新型コロナウイルス感染症による色々なケースが発生し、対応に苦労したが、全員が無事に「保育実習Ⅱ」を終えることができた。緊迫した中でも、現場の子どもたちに励まされ、保育士の感染症対策に感心し、責任実習に緊張し多くのことを学んできた学生の顔は1年次と比較にならないほど達成感に満ちていた。

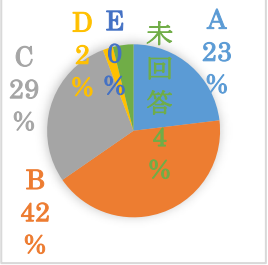
2019年度（1年次）と2020年度（2年次）の現場評価と自己評価について、総合評価、実習の記録に対する評価に限定して比較を行った。その結果は以下の図1から図8の通りである。なお、2020年度は集計時点でまだ数名の評価が揃っていなかったため、AからEまでの合計は100%にならない。

①総合評価（現場・自己比較）

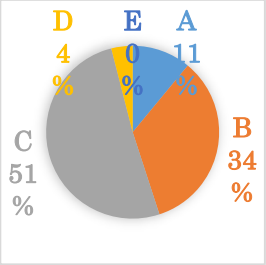
＜図 1＞2019 年度
総合評価（現場）



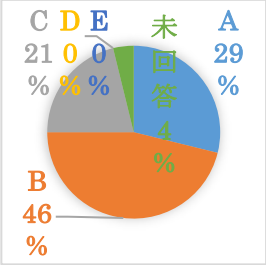
＜図 2＞2020 年度
総合評価（現場）



＜図 3＞2019 年度
総合評価（自己）

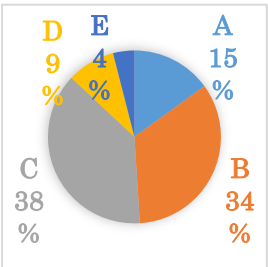


＜図 4＞2020 年度
総合評価（自己）

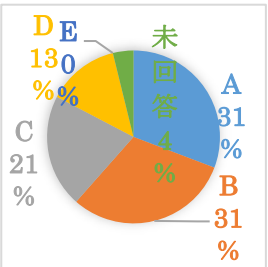


②記録（現場・自己）

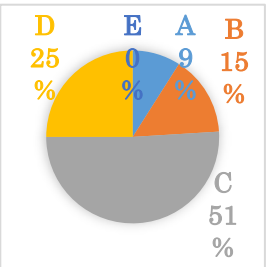
＜図 5＞2019 年度
実習の記録評価（現場）



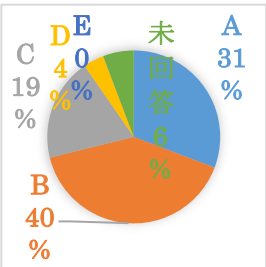
＜図 6＞2020 年度
実習の記録評価（現場）



＜図 7＞2019 年度
実習の記録評価（自己）



＜図 8＞2020 年度
実習の記録評価（自己）



比較結果から、総合評価、実習の記録において、現場評価、自己評価とも 2 年次（2020 年度）では肯定的評価が増加していることがわかる。特に「実習の記録」に対する自己評価においては肯定的評価が 47%増加し、71%の学生は「大変よくできる」「よくできる」と評価したことが分かった。

1 年次の総合評価において過半数の学生が自己評価で C 以下の評価をした原因が「実習の記録」による苦手意識と捉え、2 年次において「実習の記録」の学びを強化してきたことが、2 年次の肯定的な自己評価の増加につながり、成果として現れたと考えられる。

3）苦手意識を克服することと実習における達成感

実習を終えて、まとめの授業を行った。学生たちが主体的に、現場で体験してきたことを語り合い、活発な交流ができた。また、どの学生もやり切った達成感に満ちた表情をしていた。特に、1 年次の実習で現場から、「国語指導まではできません」と厳しく指摘された学生が今回の実習では「実習の記録」の現場評価で A がつけられていた。その学生は、事前指導で指導計画案を作成する際に何度も教員に相談にきた。その都度、自分がやりたい内容について、口頭で話をし、その内容を文字に起こしてみる作業を何回も繰り返した。その結果、実習中、現場の保育士から文字や書き方について厳しく指摘されることなく、設定保育においても子どもの反応から手ごたえを感じ、「うまくできた」と自分を評価ほどの自信につながったと思われる。

また、「資料として配布された実習の記録の見本を参考にして書いたら、いっぱい書けた」「1 年生の時より、早く書き終えることができたから、睡眠時間が確保できた」という感想も多くあった。多くの学生が「実習の記録がなかったらいいのに」と感じた 1 年次から、書くことはしんどいが、書けるようになってきた自分の成長に気づき、実習中の設定保育や絵本の読み聞かせ、ピアノの弾き歌いなど、自分のできることをいろいろ試してきて、「楽しかった」と評価できるようになった 2 年次の実習は、学生の主体的な

学びにつながっている。

苦手意識をそのままにせず、何が学生にとって苦手意識につながっているかを分析し、授業内容に反映していくことを本学の課題としてとらえ、改善を行ってきたことが、一定の成果につながったと言える。

６．考察

本学の実習指導のあり方や講義内容について、学生の実習における現場評価と自己評価を比較、検討することで、学生の課題である「実習の記録」に対する苦手意識を克服するための、実習指導の在り方、また、科目間連携として教育課程論の授業内容の工夫について述べてきた。

教育課程論においては、実習の経験を振り返ってエピソード記録を書き、これを冊子にして読み合うという取り組みを行った。記録に対する抵抗感を取り除くため、実習直後にエピソード記録作成の機会を設けたこと、授業担当者に伝わるように書いてほしいと伝えたこと、エピソードを書く前に「いつ、どこで、だれが、なにを、どのように、どうした」という視点で書く内容を整理するワークに取り組んだこと、エピソードを冊子に綴じ他の学生と共有したこと等の工夫を行った。その結果、書くことに対する意欲を高め、記録に対する苦手意識を少しずつ乗り越えようとする学生の姿が見られた。ただし、この段階では観察したことを書くにとどまっており、2 年生に向けて「気づき」や考察を書けるようになるという課題が残った。

実習指導においては、学生の苦手意識を克服し、主体的な学びにつながるための授業をどのように創意工夫するかについて評価を分析し、課題をとらえた的確な授業を行っていくことが重要であることが分かった。2 年次の幼稚園実習を終え、幼稚園からは、「実習の記録」について、「気づき」はよくかけているが、「気づき」でおわり、その先にある「保育士のねらいや配慮、援助等についても考えて書くこと」が求められた。後期授業の課題が見えたのも、学生にとっての「実習の記録」の意義を単に記録に残すものとせず、学生の専門性を向上させるための学びの一つとしてとらえることができたからこそ、教員としての課題につながったと考えられる。実習を軸とした科目間連携に力を入れてきた本学の教授内容について、学生の課題の本質を分析し、教員間で共有しあいながら、個々の授業の中での創意工夫につなげていくことが大切である。

学生は、実習及び実習指導を中心に各科目で課題に取り組み、苦手意識を乗り越え成長することができる。本稿では、実習指導や教育課程論の取り組みを通して、学生が「実習の記録」に対する苦手意識を克服していったことを述べた。さらに、実習全体に対する総合評価においても、肯定的に自分を評価することができるようになっていた。

こうした自己評価の変化と連なるように、学生たちの見せる姿も変わった。これまでは授業の中で課題に取り組む際、「面倒くさい」「やりたくない」とネガティブな発言する、「先生、何やったら良いん」「グループの子がやってくれるから」と活動に主体的になれないなどの様子が多く見られた。しかし、2 年生の実習を終え大学に戻ってきた学生たちの「実習のまとめ」に取り組む姿は違っていた。グループで意見を出し合い、自分たちが主体となって活動を進め、時間ギリギリまで妥協せず、実習の成果をまとめる作業に全力で取り組んでいた。こうした姿から、実習をやり遂げた、頑張ることができたという実習に対する自己評価の高まりが、自分自身への肯定的な認識につながったのではないかと感じられた。

目の前のひとつひとつの課題に取り組むことが、より大きな取り組みへの評価の向上につながる。さらにその評価が、自分という存在自体への肯定感を高める。その中で、学生たちは不安感や緊張感を乗り越え、自分らしさを発揮しながら活動できるようになっていくのではないかと考えられる。

７．学生の課題にどのように向き合うか

１）コロナ禍における実習

2020 年度はコロナ禍の中で、「保育実習Ⅱ」は 6 月初旬実施予定だったが、2 ヵ月時期を遅らせての実施となった。授業については、緊急事態宣言の解除後、オンライン授業も取り入れつつ、実習指導については対面授業にこだわって、感染症対策をとりながらいち早く再開した。

保育園においては、コロナ禍の中でも、医療従事者を初め、保育を必要とする子どもたちを受け入れ続けていた。保育園とは、緊急時、災害時でも地域の子育て支援の拠点となる場所である。学生とはいえ、1年後には保育士として社会に巣立っていく。保育園の果たす役割や保育士としての責務について、このような時代だからこそ、自分たちが目指す職業が専門性に裏付けられた資格職であること、地域から求められる仕事であることを感じてほしいと思った。筆者（実習担当）は元保育士であるからこそ余計に、これから保育士をめざす学生が夢と誇りをもって保育の仕事に就いてほしいと願っている。

学生たちはコロナ禍で不安感も高く、「私たち資格とれるの」と不安そうに聞くことも多かった。そのような学生に寄り添いながら、資格を取得するための最善の利益の保障と万全の準備を行うことが大学としての責務であると捉え、実習指導を行ってきた。

２）実習でもとめられているもの

実習実施基準では「保育実習は、その習得した教科全体の知識、技能を基礎とし、これらを総合的に実践する応用能力を養うため、児童に対する理解を通じて保育の理論と実践の関係について習熟する事を目的とする」とされている[10]。

本学では「教育と実践を結びつけるために保育実習・幼稚園実習を軸に保育士並びに幼稚園教諭に必要な専門的知識及び技術を教授し、保育士資格並びに幼稚園教諭免許状を取得するとともに、児童福祉・幼児教育の発展に貢献する人材を養成する」ことを目的とし、実習を軸とした養成教育を行っている。

また、保育を取り巻く社会情勢の変化の中で、2015（平成27）年4月には「子ども・子育て支援新制度」が施行され、2017（平成29）年3月には保育所保育指針が改定された。（厚生労働大臣告示、2018（平成30）年4月適用）さらに同年、「保育所等キャリアアップ研修ガイドライン」が整備されたことを踏まえ、今後の保育士に必要となる専門的知識及び技術を念頭に置きつつ、保育士養成課程を構築する教科目の見直しに向けた検討が行われた。見直しの観点は、「より実践力のある保育士養成」である。そのための留意点として「保育士養成課程を構成する教科目全体の体系化・構造化、それによる各教科目の位置づけや教科目間の関連性の明確化（特に基礎事項の理解と、それを踏まえた実践力の習得）」が指摘されている[11]。

３）生活を背負って生きる学生

1年次の実習では、6人の学生が中止せざるを得ない結果になった。その背景は個々によって違うが、学生のこれまで生きてきた生活背景が大きく影響していることは明らかである。ある学生は、社会人であるが、会社勤めのときにメンタル疾患で休職し退職した経緯を持つ。実習が始まったと同時にフラッシュバックして実習にいけなくなった。また、ある学生は経済的困難な中でアルバイトをしながら、家族の面倒を見てきた。その中で、欠席がちになり学業の継続が困難になった。ある学生は、生い立ちの中での経験から保育者の子どもへの対応に過剰に反応し、自分の中で整理できず実習困難となった。

実習中止の要因は個々によって違うが、「保育士の資格を取得したい」と望んで入学してきた学生の家庭的背景は年々厳しくなってきていることは明白である。そして、保育所等の実習に向かうにあたって、生活背景に困難を抱える学生にとっては、大きな壁になる場合もある。

保育所は、「子どもが生涯にわたる人間形成にとって極めて重要な時期に、その生活時間の大半を過ごす場である。このため、保育所の保育は子どもたちが現在を最も良く生き、望ましい未来をつくり出す力の基礎を培うために、次の目標を目指して行わなければならない。（以下略）」[12]とあるように生活する場所であり、保育所に通う子どももまた生活を背負って保育所に登所してくる。その子どもを受けとめる保育士は、子ども・保護者の生活すべてを受けとめて「安心できる居場所」を提供するのが仕事である。保育士をめざす学生もまた、子どもたちの生活まるごとを受けとめる気持ちで実習に臨むことが求められる。そうした中で、自分自身の生活が安定していることが実習に向かう基本姿勢として求められる。保育実習において、学生自身の生活背景や生い立ちの中での心理的不安にどこまで寄り添い、援助できるかも保育士養成の課題となるのではないだろうか。

昨今、「実践力」が養成校の課題とされているが、「実践力」こそ、保育所に就職してから積み上げてい

くものであり、養成校としての課題は、学生がこれまで生きてきた人生の中でいかに「自己肯定感」を育て、人間関係の幅を広げていくかではないだろうか。

短期大学ではあるが、保育所と同じ様に人生の縮図が学生の中にある。「資格を取って働きたい」願いは、学生たちが今の生活から抜け出したい希望の光でもあったはずである。その光を灯し続けることが養成校にも求められているのではないかと考える。

参考文献／引用文献／脚注

1　厚生労働省『保育所保育指針解説』フレーベル館、2018（平成 30）年 3 月、p.52

2　田中耕治編『よくわかる教育課程　第 2 版』ミネルヴァ書房、2018 年、p.3

3　厚生労働省『保育所保育指針解説』フレーベル館、2018（平成 30）年 3 月、p.38

4　同上書、p.45

5　同上書、p.42

6　同上書、p.52

7　同上書、p.53

8　同上書、p.53

9　髙砂朋子・永谷孝代「実習を軸とした本学独自科目『保育基礎ゼミ』と実習指導の連携についての現状と課題」『創発』第 18 号、大阪健康福祉短期大学、2019 年 3 月、pp.31-39

10　厚生労働省「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」「（別紙２）保育所実習実施基準」2015（平成 27）年 3 月 31 日

11　保育士養成課程等検討会「保育士養成課程等の見直しについて～より実践力のある保育士養成に向けて～（検討整理）」2017（平成 29）年 12 月 4 日

12　厚生労働省『保育所保育指針解説』フレーベル館、2018（平成 30）年 3 月、p.19